

『南山神学』36号(2013年3月) pp.79-100.

グレゴリオ聖歌研究 (5)

——「主の降誕 日中のミサ」の入祭唱
「Puer natus est」の理解に寄せて——

西脇 純

はじめに

膨大なグレゴリオ聖歌のテキストの大半は聖書に基づいている。聖書本文を直接歌う詩編唱、賛課のベネディクトゥス、晩課のマニフィカトなどはその最たるものであろう。ミサ通常文は聖書句のいわばセントニゼーションとみることもできるし、各時課で歌われる賛歌 (Hymnus) など、聖書の直接引用ではないが「聖書のいぶきと感動から湧出した」(『典礼憲章』24条) レパートリーも多い。

これは、グレゴリオ聖歌がそもそも聖書とともにある生活から生まれた祈りの音楽であるということを雄弁に物語っている。とくにグレゴリオ聖歌形成期の修道院や教育機関では、自身の血となり肉となるまで聖書の暗記に努め、聖書の教えに誠実に生きようとする生活が営まれていた。グレゴリオ聖歌のテキストの精選と旋律は、こうした霊的生活のなかでいっそう精錬されていったといえよう。

わけてもキリスト教的生活の要となる典礼こそはグレゴリオ聖歌の揺籃であり苗床であった。第二バチカン公会議が再確認した「典礼行為におけるキリス

トの現存」(『典礼憲章』7条)は、中世人にとってはまったく自明のことだった¹。とくに「神の語りかけ」としての聖書朗読、わけてもその最高の形式である歌唱が、典礼という神臨在の場でいかに「神のことばに」ふさわしく響くか、これが典礼に与る彼らの大きな関心事となった。彼らは聖書を熟読し、その意味を咀嚼し吟味したうえで、彼らの理解を尽くして「神のことば」を「音響体 Klangleib」として典礼の場にいわば「受肉」させていったと考えられる²。

そうであれば、グレゴリオ聖歌形成期と目される8~9世紀のキリスト者たちが聖書をどのように理解していたかが、グレゴリオ聖歌の神学を解くひとつの鍵になる。近年のグレゴリオ聖歌研究が、写本研究と並んで、中世の聖書解釈に目を向け始めているのも故なきことではない。この時代は専ら古代教父の遺産の受容に努めた時期にあたる。そこで研究者たちは、ミラノ司教アンブロジウス(+397年)、ヒッポ司教アウグスティヌス(+430年)、イングランドのバーダ・ヴェネラビリス(+735年)といった、中世において愛読された教父たち

*略記は、別記しない限り、S. M. Schwertner, *Theologische Realenzyklopädie. Abkürzungsverzeichnis. 2., überarb. und erw. Aufl.*, Berlin - New York 1994. に従った。アンブロジウスの著作は、*Sancti Ambrosii Episcopi Mediolanensis Opera*, Roma - Milano 1977- (= SAEMO) に拠った。

¹ Arnold Angenendt, *Geschichte der Religiosität im Mittelalter*, Darmstadt 1997, 431-439. 435; 477-478.

² Godehard Joppich, *Vom Schriftwort zum Klangwort*, in: IAH Bulletin 23 (1995), 89-122. 「Klangleib」は文学解釈の分野で用いられる。例えば、大山定一「ゲーテの『湖上』について: Versuch einer Interpretation Goethe's "Auf dem See"」『京都大學文學部研究紀要』第4巻(1956年)959-988. 981頁は、詩人グンドルフが著書『ゲーテ』(Friedrich Gundolf, 1880-1931年)のなかでゲーテ文学を評する際に用いた「Klangleib」を、「音聲的肉體」と訳している。大山によれば、この場合「音聲的肉體」とは「生命のままに、ただよふ雰圍氣となり、呼吸となり、にほひとなる(言葉)」(p. 981)「生きた瞬間の表情のまま、たえず流動する感情の一呼吸一呼吸となつてひびく言葉」(p. 986)であり、端的にいえば「生きた『肉聲』」(p. 985)である。グンドルフ自身は「体験と言葉の隔たりが取り払われた」場に響く「Klangleib」について、次のように記している。Cf. F. Gundolf, *Goethe*, Berlin 1920, 101-102: *In Goethes Lyrik ist das Erlebnis gleich Wort, das Werden selbst ist Sprache, das Gefühl braucht keinen Bildleib, sondern hat gleich einen Klangleib. Das war aber nur möglich, weil Goethe werdend das werdende erlebte, und schon singend, klangleibhaft erlebte* (102).

の聖書注解に注目している³。こうした聖書解釈史的な研究は、従来のグレゴリオ聖歌の各楽曲のセミオロジー研究を補完するひとつの道となりうると思われる。

本稿では、以上を踏まえたくうえで、一例として「主の降誕 日中のミサ」の入祭唱「Puer natus est」の交唱部分のテキストを取り上げ、テキストとなったイザヤ書9章5節が、ミラノ司教アンブロジウスの著作においてどのように解釈されているのかに注目することにしたい。まず、聖歌テキストを確認し(1.)、これをウルガタ訳(2.)ならびに古ラテン語訳(3.)と比較する。次に、アンブロジウスの著作における聖書引用の状況を概観し(4.)、聖歌テキストと比較する(5.)。最後に、アンブロジウスのイザヤ書9章5節の解釈を検討したうえで、その典礼史的意義についても触れることにしたい(6.)。

1. 聖歌テキスト

まず、現在広く使用されている聖歌集『グラドゥアーレ・トゥリプレックス』から該当するテキストを示そう。

Puer natus est nobis,
 et filius datus est nobis:
 cuius imperium super humerum eius:
 et vocabitur nomen eius,
 magni consilii Angelus.⁴

³ Franz Karl Praßl, *Gregorianische Gesänge als Zeugnisse für patristisches Schriftverständnis*, in: *Beiträge zur Gregorianik* 45 (2008) 41-56.

⁴ *Graduale triplex seu Graduale Romanum Pauli PP. VI cura recognitum & rhythmicis signis a Solesmensibus monachis ornatum neumis Laudunensibus (cod. 239) et Sangallensibus (codicum San Gallensis 359 et Einsidlensis 121) nunc auctum*, Solesmes 1979, 47-48. 「一人のみどり子がわたしたちに生まれた／一人の息子がわたしたちに与えられた

現代にまで伝承されているこのテキストは、グレゴリオ聖歌の最古層の写本群においても、細かな文綴や略記の相違を除けばいずれも一致して見出すことができる⁵。このことから、最古層の写本群が筆写された8～9世紀には⁶、すでに「Puer natus est」はテキストの異同なく広く流布していたと見ることができよう。

ただし、この聖歌テキストはイザ9:5の全体の引用ではなく部分引用である。冒頭の接続詞（後に示す70人訳でいえば）「ὄτι」は省かれており、後半の、生まれ来る子の敬称のうち「力ある神」「永遠の父」「平和の君」も採用されていない。「Puer natus est」は、イザ9:5を歌う聖歌でありながら、聖書の文言を独自に取捨選択したテキストであるといえる。

2. ウルガタ訳テキストとの比較

では、このテキストはウルガタ訳聖書との間にどのような異同がみられるのだろうか。ウルガタ訳はヒエロニムス（Hieronymus, ca. 347-420年）の改訂作

／その権威は彼の肩のうえに／彼の名は呼ばれる／大いなる思召しの使者と（イザ9:5）
（試訳）

- ⁵ R.-J. Hesbertによって校訂された最初期重要写本は6写本であるが、このうち、カントール用聖歌集の写しである『モンツァのカントトリウム』（略号：M）は昇階唱とアレルヤ唱・詠唱のみを収めるため、そもそも入祭唱の記載はない。Cf. R.-J. Hesbert, *Antiphonale Missarum Sextuplex*, Bruxelles 1935, 14-15. 聖歌テキストのみを載せる、これらグレゴリオ聖歌の最古層の重要6写本について、拙稿「グレゴリオ聖歌研究（3）」『南山神学』34号（2011年）229-253. 特に244-246頁をも参照されたい。
- ⁶ 6写本のうち2写本が8世紀に作成された可能性がある。6写本の略記、成立地および推定制作年代は以下の通り。『モンツァのカントトリウム』（略号：M, 北東フランス, 9世紀中～後葉）、『ライナウのグラドゥアーレ』（略号：R, 南ドイツもしくはスイス, 8世紀）、『モン・ブランダン・のグラドゥアーレ』（略号：B, 北フランスあるいはベルギー, 8もしくは9世紀）、『コンピエーニュのグラドゥアーレ』（略号：C, カール2世禿頭王〔在位840-877年〕の宮廷サークルが制作, コンピエーニュ?, 860-877年）、『コルビーのグラドゥアーレ』（略号：K, コルビー, 9世紀中頃）、『サンリスのグラドゥアーレ』（サンリス, 877-882年）。

業の後、複雑な伝承過程を辿ったといわれる。カール大帝（在位 768-814 年）は、典礼の中心であり源泉でもある聖書の改訂を、796 年よりトゥールの聖マルティン修道院長職にあったアルクイン（Alcuin, 730/735-804 年）に依頼し、アルクインは帝の意向に沿うべくウルガタ訳聖書の改訂に着手した。カール大帝はかねてから聖書の改訂を強く希望しており、アルクイン以前にも、コルビーの修道院長マウルドラムヌス（Maudramnus, 在職 772-780/781 年）らが聖書改訂を行っていたことも知られている。アルクインの改訂を経たウルガタ訳の「完本聖書（パンデクテン）」は、おそらく 801 年に、前年ローマにおいて教皇レオ 3 世からローマ皇帝への戴冠と塗油を受けたカール大帝に贈られたとみられる。この原本は失われてしまったが、いわゆる「アルクイン聖書」と呼ばれる写しが盛んにとられてフランク王国内に行き渡り、典礼で用いられる統一聖書として普及することとなった⁷。

先に述べたように、入祭唱「Puer natus est」のテキスト自体は 8 世紀にまで遡る可能性があるため、「アルクイン聖書」より以前に確定していたと推測される。ここでは聖歌テキストとの異同を確認するためにあえて取り上げることになる。アルクインの存命中にトゥールの聖マルティン修道院で制作されたとみられ、かつ「アルクイン聖書」の写しとも推測される写本「Cod. Sang. 75」（ザンクト・ガレン修道院図書館蔵、9 世紀）の該当頁からイザ 9:5（ウルガタでは 9:6）を引用しよう。句読点は省き⁸、略字は [] 内に補った。

⁷ いわゆる「マウドラムヌス聖書」について、B. Fischer, *Lateinische Bibelhandschriften im frühen Mittelalter* (Vetus Latina AGLB 11), Freiburg 1985, 89-90. を、「アルクイン聖書」については、同 pp. 101-403. 101-113. を参照されたい。カール大帝治世下における聖書改訂について、拙稿「グレゴリオ聖歌研究 (2)」『南山神学』33 号 (2010 年) 237-258. 特に 247-248 頁をも参照。

⁸ カロリング期における句読法について、以下を参照。Cf. B. Bischoff, *Paläographie des römischen Altertums und des abendländischen Mittelalters* (GGerm 24), Berlin 2009, 224-229; 高山博, 池上俊一編『西洋中世学入門』（東京大学出版会, 2005 年）47-48 頁。

paruulus enim natus e[st] nobis
 filius datus e[st] nobis
 et factus e[st] principatus super humerum eius
 et uocabitur nomen eius
 admirabilis consiliarius⁹

一見して聖歌テキストとの異同はかなり大きいといえるだろう。聖歌の「puer」はウルガタでは「paruulus」となっており、「imperium」は「factus est principatus」と、動詞が添えられている。また、「magni consilii Angelus」もウルガタ訳では「admirabilis consiliarius」と表現されている。聖書本文の統一を意図してフランク王国に普及したウルガタ訳ではあったが、一方で、ウルガタ訳聖書が朗読された同じ典礼において、聖歌本文においてはウルガタ訳聖書との異同が許容されていたことが、この比較により推察される。

3. 古ラテン語訳テキストとの比較

さて、ウルガタ訳が普及する以前は、古ラテン語訳（Vetus Latina）と呼ばれる翻訳が広く用いられていた。古ラテン語訳とは、2世紀以降の教父資料などに残存する翻訳であるが、ウルガタ同様、大変複雑な伝承過程を辿ったといわれる。さらに、旧約聖書の諸書がギリシア語訳からの重訳であることも知ら

⁹ St. Gallen, Stiftsbibliothek, Cod. Sang. 75 (DOI: 10.5076/e-codices-csg-0075): Biblia latina Vet. et Novi Testamenti, pag. 281. (<http://www.e-codices.unifr.ch/de/list/one/csg/0075>). この引用テキストはウルガタ訳聖書の校訂版とも一致する。Cf. Biblia Sacra iuxta Vulgatam versionem adiuvantibus, B. Fischer [et al.]; recensuit et brevi apparatu critico instruxit, Robertus Weber, Editionem quintam emendatam retractatam praeparavit R. Gryson, Stuttgart³2010, 1105.

れている。現在、B. Fischer (1915-1997 年) によって開始された校訂作業が続行中であり、ここでも、R. Grysonの校訂版から引用したい¹⁰。

古ラテン語訳は、ウルガタ訳以前から流布していた翻訳であるから、入祭唱「Puer natus est」のテキストとの相似性は、ウルガタ訳よりも大きいと思われる。そこで、聖歌テキスト (Intr. と略記) を、校訂版 70 人訳 (ギリシア語訳, LXX と略記) ならびに先にあげたウルガタ訳 (Vul. と略記) とともに、古ラテン語訳の主要なテキスト族とも比較して以下に示すことにしよう。略号の X はテルトゥリアヌス (ca. 160-220 年以降) をはじめとする 2~3 世紀の教父たちの著作のなかに引用されているラテン語訳 (キプリアヌスおよびその影響下にある教父たちを除く) を、K は『クイリヌスへの証言集』をはじめとするキプリアヌス (ca. 200-258 年) の著作および 3 世紀のアフリカの偽キプリアヌス文書に引用されるラテン語訳を、C は 4~5 世紀の特にドナトゥス派の作家たちの著作に見出されるラテン語訳を、E1 ならびに E2 はヨーロッパに伝わるラテン語訳をそれぞれ指す。

Intr.	×	Puer	natus est	nobis	et filius	datus est	
LXX	ὅτι	παιδίου	ἐγεννήθη	ἡμῖν	υἱὸς καὶ	ἐδόθη	
X	quoniam	puer	natus est	nobis	×	et datus est	
K	ecce	natus	est vobis	puer	et datus	est nobis	
C	×	puer	natus est	nobis	filius	×	datus est
E1	×	puer	natus est	nobis	filius	×	datus est
E2	×	puer	natus est	nobis	et filius	datus est	
Vul.	×	parvulus enim	natus est	nobis	filius	datus est	

¹⁰ R. Gryson (ed.), *Vetus Latina. Die Reste der Altlateinischen Bibel*. Vol. 12 *Esais Pars 1*, Freiburg 1987-1993, 287-298.

Intr.	nobis	cuius	imperium	×	super	humerum	
LXX	ἡμῶν	οὗ	ἡ ἀρχὴ	ἐγενήθη	ἐπὶ	τοῦ ὤμου	
X	nobis	cuius	imperium	factum est	super	humerum	
K	filius	cuius	imperium	×	super	humeros	
C	nobis	cuius	initium	×	fuit	super	humeros
E1	nobis	cuius	principium	×	super	humeros	
E2	nobis	cuius	potestas	×	in	umeris	
Vul.	nobis	et	factus est	principatus	super	humerum	
Intr.	eius	et	vocabitur	nomen	eius	magni	
LXX	αὐτοῦ	καὶ	καλεῖται	τὸ ὄνομα	αὐτοῦ	μεγάλης	
X	ipsius	et				angelus	
K	eius	et	vocatum est	nomen	eius	magnae	
C	eius	et	vocatur	nomen	eius	magni	
E1	eius	et	vocabitur	nomen	eius	magni	
E2	eius	et	vocatur	×	×	magni	
Vul.	eius	et	vocabitur	nomen	eius	admirabilis	
Intr.	consilii	Angelus					
LXX	βουλῆς	ἄγγελος					
X	magni	cogitatus					
K	cogitationis	nuntius					
C	consilii	angelus					
E1	consilii	angelus					
E2	consilii	angelus					
Vul.	consiliarius						

この比較からわかることは、入祭唱「Puer natus est」は、北アフリカ系の X および K と読みを同じくする「imperium」と、X ならびにウルガタと同じ「humerum」を採用する箇所を除いて、ヨーロッパ伝承の古ラテン語訳に最も近いということである。しかし、聖歌テキストはこれらのいずれの伝承系統とも完全には一致せず、その意味では独立した伝承であるという点も指摘しておかねばならない。

4. アンブロジウスの聖書引用

それでは次に、グレゴリオ聖歌成立期に広く読まれた教父アンブロジウスがイザ 9:5 をどのように引用しているかを検討しよう。

アンブロジウスは、まだヒエロニムスのいわゆるウルガタ訳を知らず¹¹、当時の慣習にしたがって、いわゆる古ラテン語訳を用いていたと思われる。しかしギリシア語に堪能だったアンブロジウスは、説教などをセプトゥアギンタ(70人訳)はじめ数種のギリシア語訳を手にしなげら行つたと考えられている。彼の著作中に引用される聖書句の言葉遣いがしばしば異なっているのはそのためである。

以下、アンブロジウスの著作のなかからイザヤ 9:5 の引用句を列挙してみよう。まず、『ルカ福音書注解』が、グレゴリオ聖歌の歌詞となった部分をすべて引用している。

¹¹ ヒエロニムスが旧約聖書正典の原典からの翻訳に取り組んだのは 404/405 年頃といわれる。ヒエロニムスの聖書翻訳活動について以下を参照。Cf. *The Cambridge History of the Bible. Vol. 2. The West from the Fathers to the Reformation*, Cambridge 1969, 80-101; S. Döpp, W. Geerlings (Hg.), *Lexikon der antiken christlichen Literatur*, Freiburg-Basel-Wien 1998, 286-290. 287.

puer natus est nobis
 filius datus est nobis
 cuius principium super humeros eius
 et vocabitur nomen eius
 magni consilii angelus.
 (*In Luc. 3, 8*)¹²

この箇所でアンブロジウスは、アキィラ訳を引き合いに出している。アキィラ訳とは、ポントス出身の改宗ユダヤ人聖書学者アキィラ (Aquila) が 128 年頃に完成させた旧約聖書のギリシア語逐語訳であり、ヘブライ語原典に極端に忠実であろうとするところに特徴がある。アンブロジウスはアキィラのギリシア語訳をさらにラテン語に重訳したうえで紹介している。それによると、アキィラ訳は次のようになっていた。

puer natus est nobis
 filius datus est nobis
 et facta est mensura eius in humero eius
 et vocabitur nomen eius
 admirabilis consiliarius
 (*In Luc. 3, 8*)¹³

アンブロジウスがアキィラ訳を引き合いに出したのは、ダビデの子孫たるイエスが「人間を越える者」であることを浮き彫りにするためであった¹⁴。アキィラ

¹² Ambrosius, *Expositio Evangelii secundum Lucam* (*In Lucam.*) 3, 8 = SAEMO 11 (G. Coppa), Roma 1978, 244.

¹³ *Ibid.* 246.

イラの「facta est mensura eius彼の（裁きの）尺が（彼の肩に）置かれている」あるいは「admirabilis consiliarius驚くべき審問官」といった訳語の選択が、生まれ来るイエスの権威をアンブロジウスに強く印象づけたのかもしれない¹⁵。

「nomen eius」のみを省く引用は『ヨブとダヴィドの異議申し立てについて』にみられる。

Puer natus est nobis,
et filius datus est nobis,
cuius initium super umeros eius,
et uocatur magni consilii angelus.
(Iob 4, 4, 17)¹⁶

その他の箇所は、部分引用である。

filius datus est nobis,
cuius principium super umeros eius.
(Fid. 3, 7, 53)¹⁷

¹⁴ Ibid.: In quo Aquilae quoque interpretatione non quasi de homine, sed de eo qui ultra hominem esset uidemus exstitisse promissum.

¹⁵ アクィラ訳はオリゲネスの『ヘクサブラ』に共観聖書のひとつとして採用されていることが知られている。ここでは『ヘクサブラ』に拠ってイザ9:5のアクィラ訳を記しておこう。F. Field (ed.), *Origenis Hexaplorum quae supersunt: sive Veterum interpretum graecorum in totum Vetus Testamentum Fragmenta*. Tom. II., Hildesheim 1964 (reprint), 448: ὄτι παιδίον ἐγεννήθη ἡμῖν, υἱὸς ἐδόθη ἡμῖν καὶ ἐγένετο τὸ μέτρον ἐπ' ὤμου αὐτοῦ, καὶ ἐκάλεσεν ὄνομα αὐτοῦ, θαυμαστὸς σύμβουλος, [...].

¹⁶ Ambrosius, *De interpellatione Iob et David* (Iob) 4, 4, 17 = SAEMO 4 (G. Banterle), Roma 1980, 238.

¹⁷ Ambrosius, *De fide ad Gratianum* (Fid.) 3, 7, 53 = SAEMO 15 (C. Moreschini), Roma 1984, 216.

Cuius principium super umerum eius, [...]

(*Patr.* 6, 31)¹⁸

Puer natus est nobis,

filius datus est nobis.

(*In psalm.* 118, 10, 14; *Ps* 1, 33; *Spir.* 3, 2, 9; *Exc. Sat.* 1, 12)¹⁹

cuius principatus super humeros eius

(*In psalm.* 118, 22, 3)²⁰

consilii magni Angelus

(*Epist.* LXXVa, 37)²¹

興味深いのは、若き皇帝グラティアヌス（在位 367-383 年）に宛てたキリスト教信仰への手引書『信仰について』である。アンブロジウスは、ここで「*puer natus est nobis*」の「*nobis*」が省かれた聖書写本をわざわざ持ち出して、この欠落に意味を見出そうとしている。

それによれば、「子 *filius*」は万物の創造者であり、すべての被造物に先立って父から生まれ、「わたしたちに与えられた *datus est nobis*」。このイザヤ書の言葉は、子の先在と神性とを言い表す。一方、「生まれた *natus est*」という表

¹⁸ Ambrosius, *De patriarchis* (*Patr.*) 6, 31 = SAEMO 4 (G. Banterle), Roma 1980, 44.

¹⁹ Ambrosius, *Expositio de Psalmo CXVIII* (*In psalm.* 118) 10, 14 = SAEMO 9 (F. Pizzolato), Roma 1987, 412; *Id.*, *Expositio XII psalmodum* (*In psalm.*), 33 = SAEMO 8 (F. Pizzolato), Roma 1980, 82; *Id.*, *De Spiritu sancto ad Gratianum Augustum* (*Spir.*) 3, 2, 9 = SAEMO 16 (E. Bellini), Roma 1979, 266; *Id.*, *De excessu fratris Satyri libri duo* (*Exc. Sat.*) 1, 12 = SAEMO 18 (G. Banterle), Roma 1985, 32.

²⁰ Ambrosius, *Expositio de Psalmo CXVIII* (*In Psalm.* 118) 22, 3 = SAEMO 10 (L. F. Pizzolato), Roma 1987, 394.

²¹ Ambrosius, *Epistula* (*Ep.*) LXXVa, 37 = SAEMO 21 (G. Banterle), Roma 1988, 136.

現は、マリアからの誕生、すなわちイエスの人性を言い表している。神のひとり子は「わたしたち（の存在）から nobis」存在を与えられたのではないから、「*puer natus est nobis*」とは言われていないのだという。

ひとつひとつの言葉の意味を区別しなさい。

ひとりのみどり子が生まれた

ひとりの子がわたしたちに与えられた

(子は) 父から生まれたにもかかわらず、わたしたちにお生まれになったのではなく、わたしたちには与えられた。子がわたしたち（の存在を拠り所にして存在しているの）ではなく、わたしたちこそが子（によって存在しているの）だからである。すべての被造物の造り主であられる方は、わたしたち（の誕生）以前にすでに生まれておられたのであり、わたしたち（の存在を前提として）お生まれになったわけではない。かつて常におられ、「はじめにおられた」（ヨハ 1:1 以下）方は、今初めてお生まれになった方ではない。そうではなく、かつてそうではなかったお方がわたしたちのためにお生まれになったのである。聖書にあるように、天使が羊飼いたちに話しかけたとき、(天使は) 彼(キリスト) はわたしたちのために胎に宿られた、と告げたからである。「なぜなら、今日ダヴィデの町であなたがたのために救い主がお生まれになったからです。このお方こそ、主キリストです。」(ルカ 2:11 参照)

かつてそうではなかったお方がわたしたちのためにお生まれになった。すなわちおとめから「みどり子」が、マリアからからだがお生まれになった。このお方(みどり子 *puer*) はわたしたちの後に(わたしたちに則して)

お生まれになったのであり、かのお方（子 *filii*）はわたしたちより以前にお生まれになっておられたのである。²²

しかし一方で、アンブロジウスは「*puer natus est nobis*」とする訳が多いことも知っていた。そこで、直後に「*nobis*」を含む訳を紹介したうえで、多くの写本でそのように記されているのは、神の子であった方がマリアを通して「わたしたちのために *nobis*」生まれたことをいっているのだとも述べている。

他の写本では次のようになっている。

ひとりのみどり子がわたしたちに生まれた

ひとりの子がわたしたちに与えられた

これは、神の「子」であられた方が、わたしたちのために、マリア（の胎）から「みどり子」として生まれ、わたしたちに与えられた、という意味である。わたしたちに与えられたお方について語る預言者の言葉を聞きなさい。「わたしたちにあなたの救いをお与えください。」（詩 85:5）わたしたちの上にあるもの、天上にあるものが「与えられる」のである。聖霊につい

²² Ambrosius, *De fide ad Gratianum* (Fid.) 3, 8, 55 = SAEMO 15 (C. Moreschini), Roma 1984, 218: *Distingue singulorum momenta uerborum: Puer natus est, Filius datus est nobis* (Jes 9: 5). *Etsi ex patre 'natus', non tamen nobis natus sed 'datus' est, quia non filius propter nos, sed nos propter filium. Neque enim nobis natus est, qui et ante nos natus est, et totius est conditor creaturae. Neque nunc primum nascitur, qui erat semper et erat in principio* (Joh 1, 1). *Sed illud, quod non erat, nobis nascitur, quod etiam angelus pastoribus cum loqueretur, nobis dixit esse generatum, sicut habes scriptum: Quia natus est uobis hodie saluator, qui est Christus dominus, in ciuitate David* (Lk 2, 11). *Nobis ergo quod non erat natum est, hoc est, puer ex uirgine, corpus ex Maria; hoc enim post nos, illud ante nos.* 翻訳に際し以下を参照した。Cf. Ambrosius von Mailand, *De Fide. Über den Glauben. 2. Teilband. Übers. Und eingel. Von Chr. Marksches (FC 47/2), Turnhout 2005, 397.*

て（聖書に）次のように書かれているように、「わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛はわたしたちの心に注がれている。」（ロマ 5:5）²³

5. アンブロジウスの聖書引用との比較

以上、アンブロジウスの著作からイザヤ書 9:5 を拾い出してみた。アンブロジウスの引用を上記のグレゴリオ聖歌のテキストと比較すると、次の二つの文言上の相違に気づく。

一つは、セプトゥアギンタで「οὐ ἡ ἀρχὴ その権威は／その始めは」となっている文言の扱いである。アンブロジウスは「principium」²⁴ 「principatus」²⁵ 「initium」²⁶ の3通りの訳を知っている。加えてアンブロジウスは、ヘブライ語原文「מִסְרָה misrah（定め・主権）」を「mensura 尺度」と訳したアクィラ訳をも知っていた²⁷。一方、入祭唱「Puer natus est」は、この語に関しては北アフリカの古い伝承に従い「imperium 権威」を採用している。

もう一つの違いは、セプトゥアギンタの「ἐπὶ τοῦ ὤμου 彼の肩の上には」である。アンブロジウスは一例（*Patr.* 6, 31）を除き、一貫して複数形「humeros」を採用する。セプトゥアギンタの「ἐπὶ τοῦ ὤμου」は単数形であるから、この場合、アンブロジウスは「両肩・背中」を意味するヘブライ語原文「שְׁקֵם shekem（単数形）」を複数に訳す古ラテン語訳、もしくは（ヘブライ語原文に従い単数のまま訳すアクィラ訳とは）別のギリシア語訳に従っている可能性が高い。他方、

²³ Ambrosius, *De fide ad Gratianum* (Fid.) 3, 8, 56 = SAEMO 15 (C. Moreschini), Roma 1984, 218: Alii sic habent: Puer natus est nobis, filius datus est nobis, hoc est: Qui erat filius dei, hic e Maria puer natus est nobis et datus est nobis. Qui datus sit, audi dicentem profetam: Et salutare tuum da nobis (Ps 85:8). Quod enim supra nos est, datur, quod de caelo est, datur, sicut etiam de spiritu legimus quia caritas dei effusa est in cordibus nostris per spiritum sanctum, qui datus est nobis (Rom 5:5).

²⁴ In Luc. 3, 8 (cf. N. B. 12); Fid. 3, 7, 53 (cf. N. B. 17); *Patr.* 6, 31 (cf. N. B. 18).

²⁵ In Psalm. 118, 22, 3 (cf. N. B. 20).

²⁶ Iob 4, 4, 17 (cf. N. B. 16).

²⁷ In Luc. 3, 8 (cf. N. B. 13).

「Puer natus est」では、この部分は北アフリカの最も古い伝承である上述の「X」、もしくはウルガタ訳にならって単数形の「super humerum eius 彼の肩のうえに」となっている。

このように、聖書引用に関していえば、アンブロジウスも、グレゴリオ聖歌のテキストも、それぞれ独立しており、両者ともかなり自由な態度で伝承と向き合っていることがわかる。

6. アンブロジウスの解釈

次に、入祭唱「Puer natus est」のテキストたるイザ9:5を、アンブロジウスがどのように解釈しているかをみることにしよう。先に、「nobis」をめぐるアンブロジウスの神学主張に触れたが、ここでもまずテキストの前半部分に注目したい。

先ほど言及した『信仰について』で、アンブロジウスは、イザヤ書9:5の「principium」を「始め」と読んだうえで、キリストの十字架こそが信者の力の「始め」であり源であると述べている。次に、このキリストの「始め」を見た預言者イザヤが、「Puer natus est [nobis], filius datus est nobis」という表現を用いてキリストの両性の秘義を解き明かしたのだと述べる。

イザヤはこの「始め」を見て、それゆえに次のように言った。「ひとりのみどり子が生まれた。ひとりの子がわたしたちに与えられた。」賢者たちも彼を見て、飼葉桶のなかの小さいこどもを認めた際、彼を礼拝して言った。「ひとりのみどり子が生まれた。」星を仰ぎ見たときには彼らはこう宣言した。「ひとりの子がわたしたちに与えられた」と。ひとつはこの地上からの贈り物であり、もうひとつは天からの贈り物である。両者は一であり、神性は変化を蒙らず、人性も減ぜられることなく、両者ともに完全である。彼ら（賢者）はただひとりのお方を礼拝し、同じ（ひとりの）お方に贈り

物を献げた。それは、飼い葉桶に見えたお方が天上の主であることを示すためであった。²⁸

東方の賢者を導いた星と飼い葉桶に安らぐ幼な子とは、キリストの神性と人性の関係を言い表すためにアンブロジウスが好んで用いた対比である²⁹。ここでは、両性がキリストにおいてそれぞれ完全性を保ちつつ矛盾なく一でもある、と東方の賢者たちに信仰告白させている。

イザ9:5の「みどり子 *puer*」をキリストの人性のしるしとして読み、「子 *filius*」をキリストの神性のしるしとして読む聖書解釈は、アンブロジウスの別の著作『詩編注解』にもみられる。詩編1:2の「主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人」の幸いが述べられる箇所、アンブロジウスは神のことばを聴く順序について触れる。アンブロジウスによれば、それは、旧約で語られた救いの約束が新約において成就したことを悟るためである。

ゆえに、人はパンだけではなく、神の言葉の一言一言によっても生きている。神の言葉に耳を傾けなさい。しかし順序にしたがって耳を傾けなさい。

²⁸ Ambrosius, *De fide ad Gratianum* (Fid.) 3, 8, 54 = SAEMO 15 (C. Moreschini), Roma 1984, 218: *Vidit hoc principium Esaias et ideo ait: Puer natus est, filius datus est nobis. Viderunt et magi et ideo, cum paruulum in praesepio cernerent, adorarunt dicentes: Puer natus est, cum stellam conspicerent, praedicantes: Filius datus est nobis (Mt 2:11). Aliud munus e terris, aliud munus e coelo, et utrumque unus in utroque perfectus, et sine mutabilitate diuinitatis et sine humanae inminutione naturae. Vnum adorauerunt eidemque munera obtulerunt, ut ostenderent ipsum esse caeli dominum, qui in praesepiibus uideretur.*

²⁹ Ambrosius, *De fide ad Gratianum* (Fid.) 1, 4, 32 = SAEMO 15 (C. Moreschini), Roma 1984, 68: *Quid igitur uoluerunt sibi mystica munera inter abiecta praesepia, nisi ut intelligamus in Christo differentiam diuinitatis et carnis? Vt homo cernitur, ut dominus adoratur; jacet in pannis, sed fulget in stellis; cunae nascentem indicant, stellae dominantem; caro est, quae inuoluitur, diuinitas, cui ab angelis ministratur. Ita nec dignitas naturalis maiestatis amittitur et adsumptae carnis ueritas conprobatur.*

まず、旧約聖書を聴きなさい。新約聖書を聴く（備えが）できるよう、急いで（聴きなさい）。³⁰

アンブロジーウスは続けて、イザ9:1の「大いなる光」こそが、イエス誕生によりもたらされた人類救済のしるしであると指摘したうえで、イザ9:5を引用し、ここで語られる「子」は受肉したロゴス（ヨハ1:14）にほかならぬと述べる。

ひとりのみどり子がわたしたちに生まれた

ひとりの子がわたしたちに与えられた

「みどり子」（が生まれた）、なぜならおとめから生まれたもうから。「子」（が与えられた）、なぜなら、かかる光の造り主は神から生まれたもうから。「みどり子がわたしたちに生まれた。」信ずる「わたしたちに」。不信仰だったユダヤ人にはなく（わたしたちに）。異端者たちにはなく「わたしたちに」。マニ教徒にはなく「わたしたちに」。「わたしたちに生まれた」、なぜなら「みことばは肉となり、わたしたちの間に宿られた」から（ヨハ1:14）。おとめから肉をお受け取りになったお方が「わたしたちに生まれた。」なぜなら、マリアから人となられたから。わたしたちに肉がお生まれになり、みことばは与えられたのである。わたしたちのものがわたしたちの間に生まれ、わたしたちより上にあるものがわたしたちに贈られたのである。³¹

³⁰ Ambrosius, *Expositio XII psalmodum* (In psalm.), 33 = SAEMO 8 (F. Pizzolato), Roma 1980, 80: denique non in solo pane uiuit homo, sed in omni uerbo dei (Lk 4:4). Hoc uerbum bibe, sed ordine suo bibe, primum in ueteri testamento, cito fac ut bibas et in nouo testamento.

³¹ Id., *Expositio XII psalmodum* (In psalm.), 33 = SAEMO 8 (F. Pizzolato), Roma 1980, 82: puer, quia ortus ex uirgine est, filius, quia ex deo natus tantae auctor est lucis. Puer nobis natus est, nobis qui credimus, non Iudaeis qui non crediderunt, nobis, non haereticis, nobis, non Manicheis. Nobis natus est, quia uerbum caro factum est et habitauit in nobis (Joh 1 :14), nobis natus est qui carnem suscepit ex uirgine, quia homo est natus ex Maria.

先にみたように、ここでアンブロジウスは、いわゆるキリスト中心主義の立場から「型の論理 *typology*」を用いて旧約聖書と新約聖書とを結びつけている。それによれば、「みどり子」(イザ9:5)は、おとめマリアの肉体からとられた「肉」(ヨハ1:14)、すなわちキリストの人性を言い表し、「子」(イザ9:5)は、「みことば」(ヨハ1:14)、すなわちキリストの神性を物語る。アウグスティヌスの有名な言葉「旧約聖書のうちに新約聖書は隠れており、新約聖書のうちに旧約聖書は明らかになる」に代表されるように³²、旧約聖書を新約聖書の記述との関連で解き明かすという「型の論理」の手法は教父時代に広く知られていた。こうした聖書解釈は、当然ながら典礼における朗読配分にも影響を与えた³³。多くの西方教会では、ミサ典礼において、「ガリア式」とも呼ばれる「旧約聖書」「福音書以外の新約聖書」「福音書」の三つ組の朗読が実践されていたことも知られている³⁴。

したがって、アンブロジウスが、聖書朗読のふさわしい順序について述べた文脈において、イザ9:5とヨハネ1:14を関連づけている点には少なからず意味があると思われる。というのも、入祭唱で「*Puer natus*」を歌う「主の降誕 日中のミサ」の福音朗読は、ローマ典礼のミサ朗読配分に関する最古の二資料が一

Caro nascitur nobis, uerbum datur; quod nostrum est, inter nos natum est, quod supra nos est, nobis donatum est.

³² Augustinus, *Questionum in Heptateuchum*, 2, 73 (= PL 34, 623): in *Vetere Novum lateat, et in Novo Vetus pateat*.

³³ Cf. J. A. Jungmann, *Missarum sollemnia: eine genetische Erklärung der römischen Messe*. 5., verbesserte Aufl., Bd. 1., Wien - Freiburg - Basel 1962, 507-509.

³⁴ Cf. C. Vogel, *Medieval Liturgy. An Introduction to the Sources* (revised and translated by W. G. Storey and N. K. Rasmussen), Washington D.C. 1986, 301-304; E. Palazzo, *A History of Liturgical Books from the Beginning to the Thirteenth Century*, Minnesota 1998, 83-84. ローマのミサ典礼において本来旧約聖書を含む三つの朗読が行われていたかについては議論が分かれている。Cf. H. B. Meyer, *Eucharistie: Geschichte, Theologie, Pastoral* (GDK 4), 1989, 176.

致して示すように、伝統的にヨハネ福音書のプロローグだからであり³⁵、アンブロジウスの言及は、こうした典礼実践の背後に横たわる神学を示唆するものとして注目に値するからである。聖書朗読に旧約聖書を含める習慣が根付かなかったローマ典礼においては、アンブロジウスやアウグスティヌスなどの教父神学の影響により、旧約聖書のテキストを歌うミサ固有唱が、福音書の告げる当日の祝祭の秘義の予型としての役割をむしろ積極的に果たしていたと考えられないだろうか。

イザ9:5の解釈としては、前出の『信仰について』において、アンブロジウスはさらに、イザヤの聖句「その権威（始め）は彼の肩のうえに」がイエスの両肩が架けられた十字架を示唆するという見解をもみせている。それによれば、この示唆は、キリストの十字架に倣うというキリスト者の修徳に役立つ。

ゆえに、この類の徳を学ぶために、

ひとりの子がわたしたちに与えられた

その始めは彼の肩のうえにある

この始めこそが主の十字架である。十字架は勇敢さの源であり、聖なる殉教者たちに、受難という聖なる戦いへの道を拓いたのである。³⁶

こうしたイザ9:5を十字架と結びつける解釈は、すでにユスティノス（?-165頃）の『第一弁明』にも現われる。

³⁵ Codex Bonifatianus 1 (Hessische Landesbibliothek, Fulda, 6世紀); Codex 4160 (Weiss. 76) (Herzog-August Bibliothek, Wolfenbüttel, 645年)の二資料。Cf. H. Auf der Maur, *Feiern im Rhythmus der Zeit I. Herrenfeste in Woche und Jahr* (GDK 5), 1983, 170.

³⁶ *De fide ad Gratianum* (Fid.) 3, 7, 53 = SAEMO 15 (C. Moreschini), Roma 1984, 216-218: Et ideo ut haec uirtutum genera disceremus, filius datus est nobis, cuius principium super umeros eius. Principium illud crux domini est, principium fortitudinis, quo uia sanctis est reserata martyribus ad sacri certaminis passionem.

またキリストが生まれてのち人となるまでの時期は、他の人々が気付かぬ内に過ぎるであろうこと——これもまた実際に成就しました——これに関して前もって言われていることをお聞きください。次のとおりです。「ひとりのみどりごがわれわれのために生まれた、一人の若者がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にある。」（イザ 9:5 参照）話が進むとより明らかになるのですが、これは彼が磔にされ、そこに肩をつけた十字架の力を示すものです。³⁷

アンブロジウスは教父の伝承を受け継ぎつつ、キリストの肩が架かった十字架をキリスト教信仰を証する勇気の源ととらえている。

おわりに

以上、「主の降誕 日中のミサ」の入祭唱「Puer natus est」の理解のために、グレゴリオ聖歌形成期に愛読された教父のなかからアンブロジウスを取り上げ、聖歌テキストであるイザ 9:5 に対する彼の解釈を検討した。その結果、彼がこの聖書箇所をキリスト論的に解釈し、キリストの受肉および十字架と結びつけて読み解いていたことが明らかになった。特に、イザ 9:5 の「みどり子 puer」と「子 filius」を、それぞれキリストの人性と神性のしるしと位置づけ、これらをヨハ 1:14 の「肉 caro」と「みことば Verbum」に対応させる見解は、それがキリスト教的な聖書解釈原理を示す文脈で示されていること、さらには、現代にまで伝承・保持されている「主の降誕 日中のミサ」の入祭唱と福音朗読との対応関係からみても示唆に富む。グレゴリオ聖歌の形成期において、固有唱は、典礼の場で福音朗読と関連づけられながら、ともに祝いの内容である救

³⁷ 柴田有・三小田敏雄訳『キリスト教教父著作集第一巻 ユスティノス 第一弁明、第二弁明、ユダヤ人トリュフォンとの対話（序論）』（教文館、1992年）50頁。

済秘義を解き明かし、告知知らせ、典礼に参加する者を秘義そのものへと導く役割を果たすべく、それぞれのテキストが与えられたと考えられるからである。

今後は、引き続きアウグスティヌスを始めとする教父たちの聖書解釈、および彼らを継承した中世の神学者たちの聖書解釈と、グレゴリオ聖歌の個々の固有唱との関連を検証しつつ、セミオロジーの研究成果に学びながら、実際の楽曲がどのような聖書解釈を示しているかについても検討してゆく必要がある。

* 本稿は、「平成 24 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))(課題番号 22520158)」ならびに「2012 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2(Nanzan University Pache Research Subsidy I-A-2 for the 2012 academic year)」に基づく研究成果である。